

## 中国語とはどんな言語か

上野恵司

講演要旨 大学卒業後やや遅れてのスタートでしたが、それでも中国語を学び始めて半世紀が過ぎてしまいました。

わたくしが中国語を学ぼうとした動機や当時の学習環境、長年かかわってきた中国語検定試験の仕事などを振り返りながら、中国語学習に志す若い諸君のためにメッセージを贈ることができればと願っています。

「貸すも借りるも同じ?」、「椅子は傘の仲間か?」——駆け出しの頃、こんなエッセイふうの文章を書いたことがあります。英語のほか、社会学を専攻していた時期にドイツ語を少々、フランス語をちょっぴりかじったことのあるわたくしには、一つの動詞が正反対の意味で使われたり、同じ腰を掛ける道具でありながら“椅子”と“凳子”が峻別され、“椅子”専用の助数詞があり、それがどう考えても共通点のなさそうな“傘”と共用であったりすることが、とても新鮮に感じられました。

こんな「驚き」を切り口に、「中国語とはどんな言語か」を日本語と比較しながら考えてみたいと思います。

キーワード 成語 動詞 名詞 助数詞

### 汉语是一个什么样的语言?

讲演概要 我是大学毕业以后才开始学习汉语的。虽然开始得较晚，也已经过了半个世纪了。

通过回顾我学习汉语的动机和当时的学习环境以及我从事多年的“中国语检定考试”工作，如果能给有志于汉语学习的年轻一代一些启迪，我将感到无比欣慰。

“借出和借入一样？”“椅子是伞的同类？”初出茅庐时，我曾写过一些这样的随笔。除了英语，在读社会学时，我还学过一点儿德语、一点点儿法语。一个动词表示正相反两种意思；同是坐具却平格区分为“椅子”和“凳子”；“椅子”跟看起来与它毫无共同点的“伞”共用一个量词。这些汉语的独特之处都给我一种非常新鲜的感觉。

我想以这样的“惊异”为切入点，在与日语的对比中去思考“汉语是一个什么样的语言？”。

关键词 成语 动词 名词 量词

※以下は第4回愛知大学語学教育研究室公開講演会（2016年10月29日）における講演の内容を『日中語彙研究』編集委員会の要請に従って文章化したものである。文章化に当たっては講演内容の一部を削除したり新たに加筆したりしたところがあることをお断りしておく。

## 1. 気がつけば語学教師——わたくしと中国語

わたくしが中国語を学び始めたのは大学を卒業してからです。学問に年齢はないとはいうものの、二十歳を過ぎてからの新しい外国語は、それまでに学んだ英語やドイツ語に比べてかなり負担の大きいものでした。加えて、1972年に日本と中国の国交が回復する10年ほど前のことであったので、学習環境にも恵まれていませんでした。

せっかく学んだ中国語を試してみるチャンスが全くありません。そこで細々と行われていた民間貿易の中国船がたまたま東京湾に停泊するのを聞きつけて、煩瑣な手続きを済ませたうえで同学と上陸してくる船員を待ち受けて、一緒に街を散歩しながら会話を試みましたが、悲しくなるほど通じません。正確に言いますと、こちらが話しかけた内容は伝わっているらしいのですが、戻ってくる返答のことばが、さっぱり聞き取れないのです。

だんだんわかってきたことですが、中国国内でさえまだ普通話が普及していない時代で、しかも乗組員の多くは山東、浙江、福建といった方言地区の

出身であるうえに、必ずしも高い教育は受けていない、いわば海の荒くれ男たちです。通じないのは、こちらの学力不足だけが原因ではなかったかもしれません。国交がないということは、このように悲しく、また寂しいことなのです。

わたくしが中国語の学習に志した動機については、本誌の第5号に論文を寄せておられる板垣友子さんの薦めで、以前に「気がつけば語学教師」と題する文章を寄せたことがあるので（『中国語ジャーナル』2008年6月号、7月号、アルク）、それを使わせていただくことにします。

「どうしてまた中国語を勉強する気になったのか」と、よく聞かれる。この「また」、言うまでもなく「再び」「もう一度」という意味の「また」ではない。「なんでまたそんなことを……」「よくまたそんなことが……」と、驚きいぶかしむ気持ちを強めるのに用いる「また」である。

確かにわたくしの世代で中国語を勉強した人は少ない。「少ない」というよりも、「珍しい」と言ったほうが当たっているかもしれない。

わたくしは大学で社会学を専攻した。中国語を始めたのは大学を卒業して、もう一度母校東京教育大学（現・筑波大学）の漢文学科というところの3年生に編入させてもらってからである。このことについても、「なんでまた漢文を……」と聞かれることがある。

実は、どちらもはっきりした答えはない。卒業まぎわになって、今すぐ社会に出てしまうことに漠然とした物足りなさを覚え、アメリカやヨーロッパの本を読むことに夢中になっていた4年間を反省し、もう少し足元を見つめ直してから社会に出たいという心境になった。要するにモラトリアムを求めたのである。

日本と中国の本をもっと読んでおこう。日本の本は自分で読めばいい。中国の本を読むには手ほどきを受ける必要がある。そこで勝手知った母校の漢文学科に籍を置かせてもらったという次第である。

漢文には高校時代から興味があった。事情があって高校は夜間だった

が、その学校に岩波詩人選集の李白の巻を担当された武部利男先生がい  
らっしゃった。また、給仕をしていた昼間の高校には、後に奈良大学の学  
長を務められた清田研三先生がおられた。岩波新書の『新唐詩選』やその  
続編を夢中で読んだのは武部先生に刺激を受けてのことであり、『伝習録』  
に親しんだのは、陽明学者であられた清田先生のお人柄にあこがれてのこ  
とである。結局は受けずじまいであったが、進学に際して地元の国立二期  
校の中国語学科に願書を出しているから、わたくしの中国熱は低くはな  
かったのであろう。

さて、漢文学科に再入学はしたものの、その時点では「本を読む手ほど  
き」を受けることを考えていただけで、中国の本を読むからには中国語が  
必要であるというはっきりした自覚はまだなかった。新学期が始まって受  
講科目を決める際に、「中国語を履修する必要はありますか」と主任教授  
に相談したことを覚えている。教授の答えは、「若い牛島君が張り切って  
いるから、付き合っただけでいいよ」というものであった。「牛島君」とは、  
当時助教授であられた牛島徳次先生のことである。先生にはのちのち大き  
な学恩をこうむることになるが、始まりは主任教授の助言による「お付き  
合い」の受講登録であった。

その年の夏休みに、学科の掲示板に張ってあったポスターを頼りに、後  
楽園の近くの古いビルの中で開かれていた倉石中国語講習会というところ  
に足を運んだ。牛島先生の熱情のこもった講義に刺激を受けて、「もっと  
中国語を」という自覚を持つに至っていたからである。

講習会の主宰者は東京大学名誉教授・倉石武四郎博士であったが、そん  
な偉い先生だとは少しも知らずに門を<sup>たた</sup>敲いた。

倉石講習会では週2回の初級クラスに登録した。南淳子先生は人一倍上  
達の遅い、音感ゼロのわたくしの発音を辛抱強く矯正してくださった。倉  
石先生は長く講習会の定番テキストであった『小学語文』を教材に、懇切  
ていねいな授業をされた。空いた曜日にも自由に聴講してよいということ  
であったので、背伸びをして牛島先生の老舎や倉石先生の『紅樓夢』のク  
ラスにも出させていただいた。

これは他の場所でも披露したことのある話だが、初めて倉石先生のお顔とお声に接した時、そんなことはあるはずがないのに、「この先生には以前どこかでお会いしている」という気がしてならなかった。お声にも確かに聞き覚えがあった。ただ、いつ、どこでであったかは、どうしても思い出せなかった。

「なぞ」は先年解けた。書棚の片隅から1冊のテキストが出てきたのだ。『NHK 中国語入門』。わずか32ページの粗末な小冊子である。実はもう半世紀以上も昔の昭和27年、中学1年生の夏休みに、何人かで友達の家を集まって宿題をしていた時に、中の1人が「ヘンなことばを聞かせてやろう」と言ってラジオを持ち出してきた。どこの国のことばだろうと皆でワイワイ言っているうちに、中国語であることが分かった。他の仲間たちはそれきりであったが、好奇心に駆られたわたくしは、なけなしの小遣いを工面して当時としては安くなかった30円のテキストを手に入れ、まだわが家にはラジオがなかったので、夏休み中ずっと友達の家に通ったのを覚えている。夏のラジオクラブ、火・木・土の午前11時から15分間、講師は東京大学教授の倉石武四郎先生。わたくしたちの知っている晩年のつややかなおつむりの先生ではなく、まだ黒髪を残されたままのお写真も載っている。開講の辞から、これが戦後初めての中国語のラジオ講座であったことが分かる。

東京での学生生活の最後の2年間は「昼は漢文、夜は中国語」という、おかしな2年間であった。倉石先生は、「ことばは音が先ですよ」と口を酸っぱくしておっしゃったし、講習会全体としても、目だけで本を読むことを邪道視する雰囲気が濃厚であった。

確かに発音から入って、音声学習を先行させ、順序よく段階を追って進んでいくのが語学の正道なのであろうが、人よりも遅れて門をくぐったわたくしには先を急ぐ事情があった。漢文学科で習う古典は訓読し、近世の口語体の作品や現代中国語の文章はひっくり返さずに頭から読むが、目が先行し音声は後回しという、はなはだ徹底しない学び方であった。

語学教師になることを目指して中国語を学び始めたわけではない。た

だ、研究するにしても楽しむにしても、資料はきちんと読みたいと思い、気づいたことを書き留めて発表したりしているうちに、「ミイラ取りがミイラに」ではないが、いつの間にやら深みにはまってしまったという、いかげんな教師である。これでも務まっているのは、同世代に中国語などやる変わり者はほとんどいなかったからに違いない。見習ってはいけない悪いお手本、「反面教師」といったところだろうか。

現在、わたくしは日本中国語検定協会の運営に携わっていますが、お聴きの皆さんの中には、すでに検定試験をお受けになった方やこれから受けようとされている方もおられると思いますので、わたくしと中検とのかかわりについても少し話しておきましょう。このことについては、10年ほど前に協会設立25周年を迎えた時に、『中国語の環』編集室のインタビューに応じる形で簡単に答えていますので（『中国語の環』第72号、2006年3月）、その一部を再録させていただきます。

——25周年だそうですね。おめでとうございます。

第1回の検定試験を大阪で実施したのが1981年の秋でしたから、確かに25年になります。

——どうして東京ではなく、大阪だったのですか。

この試験の実施母体が愚公会という大阪にあった民間の中国語講習会だったからです。大阪市立大学教授の香坂順一先生が主宰しておられた講習会で、大阪の伝統でしょうか、民間の方々の協力を得て、「愚公山を移す」の精神でいこうというユニークな講習会でした。大学院を終えたばかりのわたくしは、いわば塾頭格で、募集事務からカリキュラムの立案、講師の手配まで一手に引き受けていました。香坂先生や中国帰りの事務局長と一緒に生徒募集のポスターを電信柱に貼りに行ったり、駅前でビラを配ったりしたのを思い出します。

——その愚公会がなぜ検定試験を？

それには歴史があるのです。実はわたくしたちが検定試験を実施する

さらに10数年前に検定試験を実施しようという動きが一度あったのです。この試験は当時の日中関係やさまざまな難しい社会事情があって、結局は「流産」に終わってしまったのですが、愚公会はその時の試験に応募していた人たちに予定していた試験問題の解説をする催し、言ってみれば今わたくしたちの協会が行っている「一日講習会」のような催しから始まって定例の講習会に発展したものです。

講習会は時間、場所、参加人数等の制限がありますから、より多くの人びとに学習の場を、場が無理なら、せめてはきちんとした学習目標を与え、学習の成果を正しく評価し、一層の向上を目指すうえでの励みになるような制度を設けられないかということから、もう一度あの試験をということになったのです。

この時はもう中国との国交も回復し、中国語学習熱も高まっていたから、あまり大きな摩擦もなく実施することができました。

——どのくらいの人が受験したのですか。級別は現在と同じものでしたか。

第1回の志願者は60名、受験者は55名でした。級別は1級から4級まで。2級と3級の間準2級が設けられ（これはさらに1級と2級の間準1級を設けるといふものに改められました）、4級の下に準4級が設けられ、現在の6段階に落ち着いたのはずっと後のことです。

——出題形式はどんなでしたか。

現在とはまったく異なっていました。例えば3級を見てみますと、第1問が「次の漢字にピンインを付し、日本語に訳しなさい」というもので、“电影”“要紧”“动身”などが15題。第2問はピンインを漢字に改め日本語に訳す問題で、gōngchǎng、jiāndān、kèběnなどがやはり15題。第3問は中文日訳で、漢字によるものが5題、ピンインによるものが同じく5題で、合わせて10題。第4問は日文中訳で、これも10題。といった次第で、すべて筆記問題。○×式や番号で答える問題は1問もありませんでした。2級、1級に至っては中文日訳と日文中訳のみで、2次試験で面接を課するというものでした。ちなみに問題用紙も手書きのガリ版刷りとい

うものでした。

全国展開を目指して本部を東京に移したのは1985年秋の第9回試験からですが、受験者数が急激に増加し採点の省力化を考えて正解を番号で答える問題が多くなり、採点もコンピューターに頼る部分が多くなりました。そうするしか方法はないのかもしれませんが、時折全文記述式解答の初期の頃の試験を懐かしく思い起こすことがあります。きれいに印刷された問題冊子とマークシートは、いかにも公正な検定試験にふさわしい安心感を与えてくれるはしますが、本当にこれしか方法はないのだろうか、試験のたびに考え込んでしまいます。5万人の答案を間違いなく迅速に処理するにはこれしか方法はないのかもしれませんが、検定試験の影響力が高まるにつれ、テキストの編纂や教育の現場でも検定合格を視野に入れ始めているのを知るにつけ、「検定栄えて教育減ぶ」というようなことにならなければよいがという不安が脳裏をかすめる昨今です。杞憂であってくれることを祈っています。

## 2. 中国語とはどんな言語か

前置きが長くなりましたが、本題、と言えるほどのものではありませんが、演題の「中国語とはどんな言語か」に入ります。と言っても、こんな大きなテーマに一言で答えることはできません。いや、或いは百万言を費やしたとしても答えることはできないかもしれません。「象とはどんな動物か」と聞かれたとして、動物学者ではないわたくしは、せいぜい鼻が長いとか、陸上動物の中でいちばん体が大きいとかぐらいしか答えることができません。では鼻さえ長ければすべて象かと問い返されると、たちまち返答に窮してしまいます。まあ以下の話は「象は？」と聞かれて、「鼻が長い」と答えるレベルの話です。そのつもりでお聞きください。

### 2.1 中国語は英語に似ているか

よく中国語は英語に似ているという話を耳にします。本当にそうでしょう



か。そういうことを言う人に「どこが似ていますか」と聞きますと、「文法が似ている」という答えが返ってきます。「文法のどこが？」と聞きますと、「動詞と目的語の配列順序が同じだ」と言います。

動詞 (V) と目的語 (O) の配列順序について見る限りでは確かにどちらも V+O の語順をとり、英語と中国語は完全に一致し、目的語が先で動詞が後、すなわち O+V の語順をとる日本語とは正反対です。

しかしながら、動詞と目的語の配列順序が同じであるという事実だけをもって、英語と中国語の文法は似ていると言えるのでしょうか。考えてみてください。動詞と目的語の配列順は VO か OV か、この二つしかありません。だとすれば、5,000とも8,000とも言われる世界の言語のうち、任意の二つの言語が一致する確率は50パーセントなのです。

他にも相違点はいくらでも挙げることができます。例えば、「わたしは学生です」という意味の“我是学生”と“I am a student”。この限りでは中国語と英語の文法は酷似していて、“是”は英語の be 動詞のはたらきをしていると言えそうです。

では、「わたしたちは学生です」と主語が複数になった場合はどうでしょうか。

我们是学生。

We are students.

主語はどちらも変化しますが、英語のほうは主語の数の変化に応じて is が are に変化するのに対して、中国語のほうは主語の数にかかわらず“是”のままです。さらに英語のほうは主語の we が複数形であるのに対応して、補語の student のほうも students と複数形に変化します。この事実をもって英文法は数の表現が厳密であると言う人がいます。なるほど中国語のほうは主語が複数形の“我们”に変わったにもかかわらず、目的語の“学生”のほうはそのままであって、一見、数の表現があいまいであるかのように感じられます。

でも、本当に英語の数の表現は厳密であって、中国語はあいまいであると言いきれるのでしょうか。主語が複数形である以上、述語部分も主語に合わ

せて複数形で応じる英語と、主語を見て複数形であることがわかっている以上、わざわざ述語部分を複数形にすることを必要としない中国語。これは数に対する応じ方の違いであって、どちらも数の観念を意識していることに変わりはないようです。この限りでは、中国語の“我们是学生”は、むしろ日本語の「わたしたちは学生です」に近いのではないのでしょうか。

もういちいち例は挙げませんが、安易にどの言語はどの言語と似ているなどと言わないことです。

## 2.2 動詞をどこに置くか——文の組み立ての決め手 (1)

たいていの初級テキストに書いてあることで、或いは書いてなくても必ず入門期の授業で触られることですから、いまさら持ち出すのは気が引けますが、例えば、

姐姐给妹妹一件毛衣。

という中国語は、日本語では

姉ハ妹ニ一枚ノセーターヲ与エル。

のほかに、幾通りもの語順に訳すことができます。言うまでもなく、助詞テ、ニ、ヲ、ハのはたらきに助けられてのことです。極端な場合、まあそんなふうにする人はいないでしょうが、「姉ハ与エル一枚ノセーターヲ妹ニ」と言ったとしても、意味が通じないわけではありません。ところが、上の中国語は“姐姐给妹妹一件毛衣”以外に並べ替えようがありません。“一件毛衣”を文頭に移したら文は成り立ちませんし、“姐姐”と“妹妹”を置き換えたなら、与える側と貰う側が入れ代わってしまいます。

指摘するまでもないことですが、“姐姐给妹妹一件毛衣”という文の中でいちばん大事なはたらきをしているのは“给”という動詞です。中国語の文を組み立てるうえで最も注意を要するのは、動詞をどの位置に据えるかということですが。

## 2.3 隠れている動詞を補う——文の組み立ての決め手 (2)

中国語の動詞は位置が重要なだけでなく、日本語では隠れている場合に

も表に出てきます。また使い分けも大切です。次の例文を見てください。

- ①わたしはコーヒーが好きだ。
- ②わたしは音楽が好きだ。
- ③わたしは魯迅が好きだ。
- ④吾輩は猫である。
- ⑤僕はウナギだ。

①から③まではいずれも「……が好きだ」という文です。日本語としてはこれで完全な文ですが、中国語としては“喜欢……”とただけでは完全とは言えません。①の「わたしはコーヒーが好きだ」を“我喜欢咖啡”とただけでは、まったく通じないということはなさそうですが、やはりより自然な表現としては「飲む」という意味の動詞“喝”を補って“我喜欢喝咖啡”としなければなりません。②も同様に、「音楽が好きだ」は「聴く」ことが好きだと解して“我喜欢听音乐”とします。

③の「魯迅が好きだ」はちょっと厄介ですね。許広平夫人なら“我喜欢鲁迅”または“我爱鲁迅”でよいのですが、わたくしたちのいう「魯迅が好きだ」は「魯迅の作品」について言っているわけですから、やはり動詞を補って、“我喜欢看鲁迅小说”、“我喜欢读鲁迅作品”などとすべきでしょう。“看”の代わりに“阅读”を使うともっと上等に聞こえるかもしれません。

④の「吾輩は猫である」は言うまでもなく夏目漱石の代表作です。この作品は「猫」である「吾輩」の目で描かれているのですから、そのまま“我是猫”と訳すしかなさそうです。事実、わたくしの手元にある何種類かの翻訳は、いずれも“我是猫”です。

しかし、⑤の「僕はウナギだ」はそうは行きません。もちろん漱石をまねてウナギの目で書いたというのなら、話は別ですが。普通にはレストランで注文している場面でのことばと解すべきでしょう。ウナギを辞書にあるとおり“鰻魚”と訳してよいかどうかは暫くおくとして、ここはやはり食べるという意味の“吃”か、注文するという意味の“点”を補って、“我吃鰻魚”もしくは“我点鰻魚”とすべきでしょう。うどん屋で交わされる「部長はタヌキですか、僕はキツネです」も同様に処理します。もっとも、うどんのタ

ヌキとキツネをどう訳せばよいのかは、わたくしは知りませんが（笑）。

「君はバスか、僕は自転車だ」も、「わたしは万年筆です」も、「手書きです」も、「阪神です」も、「蛍光灯です」も、「紙の辞書です」も、「運動靴です」も、「下駄です」も、「夏だ」も、「冬だ」も、「タタミだ」も、「北海道だ」も、「沖縄だ」も……、すべて動詞を補って表現しなければなりません。

#### 2.4 中国人の動詞好き、日本人の名詞好き

わたくしは中国語の成語やことわざに興味があって、小さな辞典を編んだりもしていますが、そんな過程で気づいたことがあります。

まず次の成語やことわざを日本語でどう言うか考えてみてください。

- ①狐假虎威 (hú jiǎ hǔ wēi)
- ②塞翁失马 (sài wēng shī mǎ)
- ③紙上谈兵 (zhǐ shàng tán bīng)
- ④若无其事 (ruò wú qí shì)
- ⑤五十步笑百步 (wǔshí bù xiào bǎi bù)
- ⑥快刀斩乱麻 (kuàidāo zhǎn luànmá)
- ⑦疑心生暗鬼 (yíxīn shēng ànguǐ)
- ⑧水火不相容 (shuǐhuǒ bù xiāngróng)

①の“狐假虎威”は中国語に沿って読みますと「狐、虎の威を假る」と動詞型になりますね。でも、日本語ではそうは読まずに、「虎の威を假る狐」と名詞型にしてしまうのが普通です。

②の“塞翁失马”も、中国語では「塞翁馬を失う」で動詞型、日本語では「塞翁が馬」、或いは「人間万事塞翁が馬」などとも言いますが、いずれにしても名詞型。

③の“紙上谈兵”も「紙の上で兵を語る」が「机上の空論」、「畳の上の水練」。

④の“若无其事”の「其の事無きが若し」は「何喰わぬ顔」。「知らぬ顔の半兵衛」なんてのもありますが、ちょっとずれてるかな。

⑤の“五十步笑百步”は「五十步百歩を笑う」。『孟子』に出てくる故事で

すね。戦場でおじけづいて五十歩逃げた男が百歩逃げた男をおまえは臆病者だと笑ったとか。少しの違いはあるにしても、本質的には同じだというたとえに使われるのは皆さんご存じのとおりです。でもこのことわざ、日本語では「五十歩百歩」で止めてしまって「笑う」は省略するのが普通です。たいていの、少なくともわたくしの見た限りの国語辞典は、みな「五十歩百歩」で見出しを立てています。国語辞典はまあそれでも構わないのですが、漢和辞典や中国語辞典の中にもそのような扱いをしているものがあるのは、ちょっと困りますね。

⑥の“快刀斩乱麻”も同様で、「快刀乱麻を断つ」が「快刀乱麻」。スポーツ紙に「〇〇快刀乱麻の力投」なんて見出しを見かけることがあります。

⑦の“疑心生暗鬼”も「疑心暗鬼を生ず」が「疑心暗鬼」。

⑧の“水火不相容”も「水火相容れず」が「水と油」。

以上の例からも、中国語がいかに動詞を大切にしているか、日本語がいかに名詞型の表現を好むかを見て取ることができます。他にも例が見つかるはずですから、興味のある方は探してみてください。

## 2.5 中国語の動詞の特徴は？

以下に最もよく中国語の特徴をうかがうことができると思われる動詞を思いつくままに掲げます。

借 (jiè) = 貸す、借りる

借钱 金を貸す、金を借りる 借给他 彼に貸す 跟他借 彼に借りる

租 (zū) = 賃貸しする、賃借りする

租给人 人に貸す 租不起 (高くて) 借りられない

倒 (dào) = (容器を) 傾ける、逆様にする

倒水 水を汲む、水を捨てる

倒垃圾 ゴミを捨てる

擦 (cā) = 物の表面をこする

擦汗 汗をぬぐう 擦脸 顔を拭く 擦眼泪 涙をぬぐう

擦鞋油 靴墨を塗る 擦黑板 黒板を消す 擦粉 おしろいを塗る

擦火柴 マッチをする 擦药 薬を塗る  
擦油泥 (油污れをこすりとり) 時計を分解掃除する  
擦屁股 (用便後に尻をふく) 他人の尻ぬぐいをする  
包 (bāo) =包む、くるむ  
包东西 物を包む 包饺子 ギョーザをつくる (=捏 niē 餃子)  
捏 (niē) = (指の腹で) こねる、こねてつくる  
捏泥人儿 泥人形をつくる  
打 (dǎ) =液体を汲む (いくつかあるうちの基本義の一つ)  
打酒 酒を汲む (量る) ⇒酒を買う、酒を売る  
割 (gē) 肉 肉を切る、買う、売る  
撕 (sī) 布 布を裂く、買う、売る (=扯 chě 布)  
剪 (jiǎn) 布 布を切る、買う、売る  
量 (liáng) 米 米を量る、買う、売る  
抓 (zhuā) 药 漢方薬をつかむ、買う、売る 抓贼 泥棒をつかまえる  
撮 (cuō) 药 漢方薬をつまむ、買う、売る  
盖 (gài) 盖儿 ふたをかぶせる 盖房子 家を建てる 盖章 判を押す  
穿 (chuān) 衣服 (袖に腕を通す) 服を着る  
穿裤子 (筒状の部分に足を通す) ズボンをはく  
穿胡同 路地を通り抜ける  
拉 (lā) 面条儿 (手で引っ張って) うどんをのばす  
擀 (gǎn) 面条儿 (麺棒で) うどんをのばす  
拉锯 のこぎりを引く 拉小提琴 バイオリンを弾く  
把灯拉灭 (ひもを引いて) 電灯を消す  
坐 (zuò) =腰掛けに尻をのせる  
坐开水 (こんろにやかんのしりをのせる) 湯をわかす  
坐牢 (天井の低い部屋に座る) 牢に入る (=蹲 dūn 牢)  
推 (tuī) 车 車を押す 推磨 ひき臼をひく  
推头 バリカンで頭を刈る  
刮 (guā) 风 風が吹く 刮脸 ひげを剃る

吹 (chuī) 風 風が吹きつける、ドライヤーをかける

吹灯 ローソクを消す

骑 (qí) 自行车 自転車に乗る

〈方〉踩 (cǎi) / 踏 (tà) 脚踏车 (ペダルを踏む→) 自転車に乗る

蹬 (dēng) 三轮车 リンタクを踏む 蹬長筒靴 ブーツをはく

蹬上裤子 ズボンをはく 蹬腿(儿) (足を伸ばす→) 死ぬ、くたぼる

撑 (chēng) 船 船を竿でこぐ 撑伞 傘をひらく

少吃些, 别撑着! 食べ過ぎないで、のどにつかえますよ。

刷 (shuā) 牙 歯を磨く 刷卡 カードで決済する (= 拉 lā 卡)

手元の《新华字典》を開いてみますと、この字引は《现代汉语词典》と並んで中国で最もよく使われている字引の一つですが、その“借”の項に①“暂时使用别人的财物等”(一時的に他人の金銭や品物を使用すること)、②“暂时把财物等给别人使用”(一時的に金銭や品物を他人に使用させること)とあります。要するに①借りる、②貸すで、正反対の意味です。こんなことってあるのでしょうか。もちろん、①の用例として“借钱”(お金を借りる)、“借车”(車を借りる)、“借用”(借用する)があり、また②の用例として“借给他几块钱”(彼に何元か貸す)があるところから、「借りる」と「貸す」の区別は場に支えられて混乱なく行われるのでしょうか、前後関係のない裸のままの“借”はどう解釈したらよいのでしょうか。何やら民法の条文めいたものになりますが、「返却を前提として甲から乙に一時的に金銭や品物の使用权が移動すること」とでも規定しますか。

確かに甲が乙に自己の金銭や品物の一時的使用を許すとして、これは甲から見れば「貸す」であり、乙の立場からは「借りる」であります。この貸借行為を甲、乙から離れて第三者の目で観察すると「貸す」でもなく「借りる」でもなく、上の「民法条文」になるわけです。何を目指して行われている動作であるかをいうのではなく、ただどのような動作が行われているかを絵画的に描写するだけ。これが中国語の“借”であり、この“借”が中国語の動詞の特徴、ひいては中国的思考法の特徴を、ちょっと飛躍しすぎかな、

最もよく示しています。

“倒”も面白いですね。ここに液体の入った器があるとします。当然ながら器を傾けると中の液体は外に出てしまいます。器がバケツで中身は汚水であるとします。バケツを傾けたのは汚水を捨てるためです。器が徳利で中身がお酒、下で杯がこれを受けているとします。こんどは捨てるのではなく注いだのです。

同じく器を傾ける動作が、それが何を目的とした動作であるかによって「捨てる」ともなり「注ぐ、汲む」ともなるのが日本語であり、捨てるためであろうと汲むためであろうと傾けるという動作に変わりがないので、これを絵画的に描写して、“倒”という一つの動詞で表現するのが中国語なのです。

類例はいくつでも挙げることができます。「擦」、「摩擦」の「擦」。「こする」「磨く」。力を入れ、推しつけるようにして、何度も往復する動作をいいます。例を挙げておきましたので説明は省略します。

時計の分解掃除のような込み入った作業も「擦油泥」の一言で表すことができるのは愉快ですね。他人の失敗や不始末の跡始末をすることをいう「擦屁股」は日本語でも「尻ぬぐい」でしたね。

北京で暮らしたことのある人なら誰もが経験することですが、冬から春先にかけて強い風が吹きます。地表のゴミも砂ぼこりも、こそげ取るようにして空に舞い上げます。この強い風が地表をさっと吹き抜ける様子と、シャボン塗ったひげづらを鋭利なかみそりで、じょりっと剃る動作と、どこか共通していませんか。「風が吹く」は“刮风”、「ひげを剃る」は“刮脸”と、どちらも“刮”という動詞を使います。“刮风”の“刮”は繁体字で“颯”を用いますが、これは単なる書き分けにすぎず、共に guā の一語で表されることに変わりはありません。ことばは音が先、文字は後から生まれたものです。

「先生、こんどの日曜日にみんなでお邪魔してギョーザを包みたいと思いますが。」もう30年以上も昔のことですが、北京で日本語を教えていた頃、学生からこう話しかけられました。“包饺子”、確かに「ギョーザを包む」です。おおぜいが材料を持ち寄って、小麦粉をこねて皮を棒でのぼすところか



ら、ワイワイガヤガヤ騒ぎながらギョーザパーティを楽しむ。このギョーザづくり、刻んだ具を皮に包むようにしてこしらえるところから“包”という動詞を使います。指先でつまむようにして最後の仕上げをするところから、“捏”という動詞を使う人もいます。いずれにしても、ギョーザをつくる動作を絵画的に描写していることに変わりはありません。

こんなこともありました。とても日本語のお上手な、たぶんわたくしなどよりずっときれいな日本語をお話しになる方、お名前をあげれば「ああ、あの方」とご存知の方も多はずの方ですが、ある時、職場で無人のはずの部屋にご案内いただいたところ、部屋にあかあかと電灯がついていました。先生、とっさに「誰、電気を開けっぱなしにしておいたのは？」

電気を開けっぱなし。ヘンですよ。でも、電気のスイッチのことを“电門”と言いますね。「門」なら開けることも閉めることもできます。“开电門”（スイッチを入れる）、“关电門”（スイッチを切る）。入れたり切ったりするところから、スイッチのことを“开关”とも言います。

時間の都合でいちいち説明できませんが、同じく「買う」「売る」であっても、品物をどのようにして量るかによって“割”であったり“撕”であったり“剪”であったりするもの面白いですね。

漢方の薬は草やら木の葉っぱやらを引出しから手でつかんで出してくるので“抓”を使います。

「服を着る」が袖に腕を通すところから“穿”であったり（ズボンや靴・靴下をはくも“穿”、ただし同じく身に付ける動作であっても頭にのせるだけの帽子は“穿”ではなく“戴”）、「家を建てる」が蓋をかぶせるように屋根を覆うところから“盖”であったりするところにも中国語の動詞の特徴がよく表れていると思いませんか。

今、はやりのクレジットカードによる支払いもカードを通すときの動作をとらえて“刷”（はけ・ブラシなどではく）や、地方によっては“拉”（手前に引く）を用いて、“刷卡”“拉卡”などといいます。買い物をして、レジで“刷吗？”と聞かれて驚いたことがあります。カードで支払うかということだったのでね。

## 2.6 同じ時を計る器械でも——“钟”と“表”

動詞に見られる、目的が異なっても動作に共通点があれば同じ動詞が使われるという特徴は、名詞の場合、例えば用途を同じくする器械であっても異なる名詞が選ばれるという特徴が見られます。

例えば「時計」。同じ時刻を示したり、時間を計る器械でありながら、“钟”(zhōng)と“表”(biǎo)に分かれます。“钟”は繁体字が“鐘”であることからわかるように、旧時、時を知らせるのに鐘を用いたことに由来します。“挂钟”(guàzhōng 一柱時計)、“座钟”(zuòzhōng 一置き時計)、“闹钟”(nàozhōng 一目覚し時計)などがこれに属します。一方の“表”は計器類やメーターに使われます。“手表”(shǒubiǎo 一腕時計)、“怀表”(huáibiǎo 一懐中時計)、“跑表”(pǎobiǎo 一ストップウォッチ)などがこちらに属します。

“钟”と“表”を合わせて“钟表”と称しますが、これはあくまでも総称であって、“钟表”という器械は存在するわけではありません。「時計屋」は“钟表店”という看板を掲げていますが、ここで買うことができるのは“钟”または“表”であって、“钟表”ではありません。

同じく腰を掛ける道具であっても、背もたれの部分があるかないかによって“椅子”(yǐzi)と“凳子”(dèngzi)に分かれるのも、中国語らしいところです。“椅子”も“凳子”も腰を掛ける台に変わりはないところから、今日、多くの日本人が背もたれが無くても平気で「椅子」と呼んでいるのと、わたくしは区別していますがね(笑)、大きく異なるところです。

同じく胴体を支え、歩く、はうなどの移動に使われる足を、くるぶしから上の“腿”(tuǐ)とくるぶしから先の“脚”(jiǎo)にはっきり区別するのも中国語らしいところです。

## 2.7 椅子は傘の仲間？

残り時間が迫ってきましたので、駆け足で助数詞(量詞)に移ります。中国語に“量词”(liàngcí)と称される助数詞が発達していることは、みなさんご存じのとおりです。

この助数詞の使い方にも、先に動詞と名詞について見てきたのに通じる

特徴が見られます。例えば、“一把椅子”の“把”(bǎ)、“把”の原義は「握る」という動詞です。椅子を持ち運びするのに背もたれの部分を握ります。そこで椅子を数える助数詞として“把”が選ばれました。けれども、背もたれは握るためにあるものではありません。

“把”で数えられる道具に“傘”(sǎn)があります。確かに傘は柄の部分を持って使用します。とは言っても、傘の役割は雨や日ざしを遮ることにあるのであって、握ることにあるわけではありません。

同じ「腰掛け」であっても“凳子”のほうは背もたれ、すなわち握る箇所がないので“把”で数えることができません。代わりに“张”(zhāng)を使います。“一张纸”(1枚の紙)、“一张桌子”(テーブル1脚)の“张”です。

“张”は平らな面を持つものに使われる助数詞です。“凳子”も腰をおろす部分が平面であるところから“张”が選ばれたのでしょうか。人間の顔も平べったいので、欧米人はちょっと違うかな(笑)、これも“张”を使って“一张脸”のように数えます。

「時計」のうち、先に挙げた“座钟”は“座”(zuò)を用いて数えます。“座”は、日本語でも「百座の名山」などと数えることがあるように、山を数えるのに使われる助数詞です。置き時計のどっしりとした感じが山に通じるところがあるからでしょう。腕時計の類の“表”には“块”(kuài)が使われます。バンドを除いた機械の部分の一つの塊かたまりとして捉えたのでしょうか。

塊といえませっけんも“一块肥皂”のように“块”を用いて数えます。今はもう見かけなくなりましたが、以前はよく2個続きの洗濯用のせっけんがあって、真ん中で折って使っていました。これには“块”ではなく、“一条肥皂”のように“条”を使います。

助数詞も数えられる名詞の使用目的ではなく、どのような形態上の特徴を持つかによって選ばれると見てよさそうです。

以上を要約しますと、結論と言えるほどのものではありませんが、動詞にしても、名詞にしても、或いは助数詞にしても、それが何を目指した動作か、何に分類される事物か、何に属する事物を数えるかではなく、目的や用

途とは無関係に、動作の共通性や形態上の特徴によって選択されるというのが、中国語の特徴であると言ってよさそうです。

この特徴は文（センテンス）のレベルにおいても見られます。例えば“鱼让猫吃了”。この文は「魚は猫に食われた」と受身文としても、「魚は猫に食べさせた」と使役文としても理解することができます。眼前には「猫が魚を食べた」という事実が存在するだけで、これをどら猫にさらわれたと解するか、大事な飼い猫に与えたと解するかによって、受身とも使役ともなるわけです。

ご静聴ありがとうございました。

上野恵司 Ueno Keiji 共立女子大学名誉教授・文学博士  
一般財団法人日本中国語検定協会理事長

専門：日中言語文化比較研究

略歴：大阪府生まれ。

東京教育大学（現・筑波大学）文学部社会学科、同漢文学科卒業、大阪市立大学文学研究科修士課程修了。府立高校の国語教師、関西大学専任講師、筑波大学助教授・教授、共立女子大学教授等を歴任。長くNHK ラジオ講座講師を務めた。

著書：中国の言語と文化に関する著書・論文多数。

近著に『ことばの散歩道』既刊 I～VI（白帝社、刊行中）、同書の中日対照版『中日語言文化漫歩』I～IV（吉林大学出版社）。